

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：57403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02200

研究課題名(和文)生成の実在性と純粋な関係性をめぐるベルクソン哲学の研究

研究課題名(英文) Research on the philosophy of Bergson concerning the reality of Becoming and the pure relations

研究代表者

永野 拓也 (Nagano, Takuya)

熊本高等専門学校・リベラルアーツ系人文グループ・教授

研究者番号：80390540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究費により、変化の哲学であるベルクソンの思想が、一見すると生成とは対極にある、不変かつ純粋な関係性としての数学的な概念とどのように対峙するかについて、一定の展望を得ることができた。すなわち、ベルクソンは確率・統計学的な概念を介して、数学的な関係性を生成のうちに読み込むのは避ける。ベルクソンは、部分の和ではなく、部分を包括し、部分の交代にも関わらず維持される構造として「全体」を理解する。数学的な関係性と生成は、構造としての全体という性格を共有する。このためのような投影が可能に見えるが、生成はその動的性格によって数学的関係性と区別される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、国内外のベルクソン哲学研究の深化・進展に一定の役割を果たした。初年度の国際シンポジウムにおける発表は、共著書掲載の論文の形で刊行されシンポジウム主催者から高く評価された。次年度のフランスにおける研究発表を論点共有のたたき台とし、最終年度には東京においてワークショップを主催した。この際に発表者の発表と討論を通して展開された、生成の構造や動的な性格をめぐる議論は、今後のベルクソン研究のために一つの端緒を与えたと考えられる。最終年度はさらにフランスで数理諸科学とベルクソン哲学との接続を探るシンポジウムにおいて発表し、この領域における議論の進展に一定の貢献することができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Supported by this Grant-in-Aid, I have obtained a perspective about the attitude of Bergson, whose thought regards the Becoming as principal, toward mathematical concepts which consist in static and pure relations. Namely, 1. Bergson tries to avoid seeing mathematical relations inside the Becoming, through the application of probabilistic concepts to it. 2. Bergson seizes the whole not as a sum of parts but as a structure covering them and maintaining itself despite the replacement among them. The mathematical relations and the Becoming partake features of the whole as a structure. The mathematical structure could be found inside the Becoming because of their common features, but the latter has a dynamic nature, by which it is distinguished from the former.

研究分野：フランス哲学研究(ベルクソン哲学研究)

キーワード：ベルクソン哲学 関係 全体と部分 構造

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内の研究動向

2015年度から3年間、福岡大学の平井靖史氏はベルクソン哲学と英米分析形而上学、認知科学の接点をめぐる国際シンポジウムを開催した。かつては対立が際立ったベルクソン哲学と分析哲学の間で近年は接点が模索されており、平井氏のシンポジウムもこの動向を反映するものであった。

(2) 国外の研究動向

上記平井氏のシンポジウムには、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学の Paul-Antoine Miquel 氏と、パリ・ナンテール大学の Elie During 氏が提題者として参加し、帰国後、ベルクソンと科学諸領域の研究の連携を掲げて、「京都宣言」という研究プランを提議した。これは、科学の後追いをする哲学ではなく、諸科学との動的な関係を展開する哲学を、ベルクソンから始めて追求しようという呼びかけであった。他方、数学上の「構造」とベルクソンの「持続」の関係をめぐって、トゥールーズ大学の若手研究者 Sébastien Miravete 氏は数年間、「持続は数である」という興味深い論旨を展開していた。

(3) 本研究の位置づけ

上記の国内外の動向と連動しつつ、ベルクソン哲学を数学的な角度から再検討することは有意義であると思われた。ベルクソン哲学を真に理解するには、Miravete 氏のようにベルクソンの数理哲学を追求すべきであるが、さらに、確率・統計理論に対するベルクソンの立場を問うことが、現代諸科学とベルクソンとの接点を的確に探る上で不可欠と思われた。

2. 研究の目的

(1) 解明すべきこと、解明の範囲は次のようであった。関係のシステムと確率分布を、経験を支える実在性の領域でつなぐことが、ベルクソンの同時代の心理学や生物学の狙いの一つであることを明確にする。そのうえで、ベルクソン哲学がこれに対して、やはりある種の関係として「持続」の姿をとらえながら、諸科学とは異なる仕方で生成を理解する点でオリジナルであることを明らかにする。

(2) 本研究に期待した結果は以下である。まずこのアプローチを通じて、確率論的な数学的对象を実在性とみなす19世紀後半の実験諸科学にベルクソンが対決するときの企図を明確にできると思われた。また確率論的对象へのベルクソンの態度の確認を通して、ベルクソン哲学を諸科学の知見で安易に裏書せず、両者の間に存在した緊張を捉えることができると思われた。

(3) この研究に次のような意義を期待した。経験に先立ち、経験を創発させるような実在性は、項を生成する、項のない関係としての、数学上の構造を例として語られる。20世紀の諸思想はこの方向で実在性を追及してきたし、現代の思弁的実在論もこれに近い方向性を示すと思われる。ベルクソンの場合、項と不可分な項相互の関係としての「持続」は、項を生み出す抽象的構成ではない。その具体性は経験のうちで確認される。だがまた、「持続」は経験の産物というより、経験される生成の本質的な側面を担う実在性である。本研究はこれらのベルクソン哲学の特徴を把握することにより、現代的な科学諸理論へと、ベルクソン哲学を適切な形で開くことができると思われた。

3. 研究の方法

方法としては、文献研究をベースとし、本研究の背景をなす国内外の動向を視野にいたした研究交流を行うことを計画した。

(1) 文献研究としては、一方ではベルクソンのテキスト(著作、講義録その他)、ベルクソン哲学の研究・批判文献など、他方では科学認識論的な論考や、関係する哲学著作の原典および研究文献、および関係する諸科学分野の解説書の読解を想定した。

(2) 研究交流としては、国内外の動向を把握するため、関係学会、研究会への参加を計画した。また最終年度には国内外の関係領域の専門家を招待して、小規模のシンポジウムを開催することも計画した。この企画は、内外の動向をふまえた本研究の趣旨に適合すると考えた。この企画実現のため、国内外の研究者との関係構築も必要と考えた。

4. 研究成果

(1) 2017年度

ベルクソン哲学について国際的に企画展開する研究組織Project Bergson in Japan (PBJ)の主催による10月開催の国際シンポジウム「『物質と記憶』を再起動する；拡張ベルクソン主義の諸展望」に参加し、“Relation and encounter : a reading of Bergsonian “duration” around Matter and Memory”と題する発表を行った。この発表において、ベルクソンの第一著作『意識に直接与えられたものについての試論』の「持続」および第二著作『物質と記憶』の「記憶の平面」が一種の関係としての全体だと考えられること、またこの全体が数学的かつ空間的な関係構造とは対立することを確認した。この発表はフランスのベルクソン研究の推進者Frédéric Worms氏およびPaul-Antoine Miquel氏から一定の評価を得ることができた。

1月末に渡仏し の発表について研究協力者と情報共有し、最終年度の共同研究を進めるための打ち合わせをした。同時に、束、トポス、圏やダイアグラムといった抽象度の高い関係的な代数的対象の、現代哲学に与える示唆を探るLe College International de Philosophie主催の国際シンポジウムQuand la forme devient substance: Puissance des gestes, intuition diagrammatique et phenomenologie de l'espaceに参加した。これにより、論理的推論、脳の構造から生物進化の樹状分岐についてまで何らかの示唆を与える関係的な数学的对象について、およびその哲学的な意味づけについて、有意義な示唆を得た。

(2) 2018年度

2017年度開催のシンポジウム「『物質と記憶』を再起動する；拡張ベルクソン主義の諸展望」のアクトが書籍の形で刊行され、研究代表者の論文「関係と偶然 - 『物質と記憶』をめぐる「持続」解釈の試み」が掲載された。この論文について、主著者の平井氏から本書のうちで一定の評価をいただいている。

9月の日仏哲学学会およびベルクソン哲学研究会に参加した。ベルクソン哲学研究会では、2019年度の本科研費による国際研究会の、ベルクソン哲学研究会との共催化について打診した。これを布石とし、2019年3月末のベルクソン哲学研究会において、本研究による国際ワークショップをベルクソン哲学研究会と共同開催とすることについて承認を得た。

3月初旬に渡仏。ナンテール大学主催の国際研究会 (Philosophie contemporaine au Japon et en France PASSAGES PHILOSOPHIQUES III)に参加した。研究協力を依頼している同大学のElie During氏の勧誘による。ここでは« Le tout et ses parties : remarques sur la duree bergsonienne »と題する発表を行った。これは前年度のシンポジウム発表に対して、部分・全体の関係について理論的な補強を行い、かつ論旨を簡潔にしたものである。この渡仏の際、During氏およびトゥールーズ大学のSébastien Miravete氏と、2019年度の研究計画について打ち合わせを行い、ベルクソン哲学と数学的關係との接点をめぐり、日本で9月にワークショップを行う計画の具体案を確認した。

(3) 2019年度

9月29日に東京大学本郷キャンパスにおいて、フランスから Elie During 氏 (パリ・ナンテール大学) と Sébastien Miravete 氏 (トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学) を招聘し、日本からは慶応大学の岡嶋隆佑氏および本研究代表者が発表者として参加して、本研費をもとに研究代表者の主催・ベルクソン哲学研究会の共催の形で、国際ワークショップ「ベルクソンにおける持

続とその数学的射程」を開催した。本企画については、Project Bergson in Japan (PBJ) の Web サイトのために報告を執筆した (<https://matterandmemory.jimdoofree.com/2019-2021/2019-mathematical-ranges/>)。意義については本報告書の末尾((4)の)に記す。

10月24~25日にかけて、フランスのトゥールーズ、ジャン・ジョレス大学において、当大学の Paul-Antoine Miquel 氏とパリ・ナンテール大学の Elie Durig 氏のオーガナイズによる国際ワークショップ Physical Time, Biological Time: Bergsonism Today にコメンテーターとして参加した。10月29日には、PBJの平井靖史氏とフランス、グルノーブルの「記憶の哲学センター」の Kourken Michaelian 氏の共同企画になる、同センターにおける国際ワークショップ Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives に参加し、口頭発表“Part-Whole Relation and Bergsonian“Memory””を行った。これについては国際的研究組織 La Societe des amis de Bergson の Web サイトに報告を執筆した (<https://bergson.hypotheses.org/1410>)。

(4) 成果の総括

2017年度の研究においては、当初企画したとおり、ベルクソン当時の心理学における確率論的な関係概念に対するベルクソンの警戒の検討を一つの主題とした。また同時に、全体と部分の関係という角度からの、関係性についてのベルクソンの理論の追求をもうひとつの主題とした。前者の主題をベルクソン当時の科学諸領域へ拡張することが申請段階では重要に思われたが、この2017年の発表の結果、後者の主題が本研究計画にとってより本質的なものであると確信するに至った。というのは、この角度から検討を続けることにより、トポロジーの手法を用いて代数的な群として構築される確率論的な空間と、ベルクソンにとっての生成・変化をつらぬく関係性が、どの点で重なり、どの点で相いれないのか、あるいはどの点でベルクソンは生成・変化の関係性をより根源的とみなすのかを、比較的明瞭に把握できると思われたからである。

そこで2018年度以降は、ベルクソン当時の諸科学の確率論的な関係性への傾斜に関して、当初に計画した横断的な検討は文脈が許すかぎりにとどめることにした。その代わりに、主として全体-部分関係についての代数的・哲学的考察(メレオロジー)をベースとする現代の形式存在論の文献を参照し、ベルクソンの全体-部分論をこれと照合しつつ計画を進めることにした。During 氏からはこの方向でのワークショップ開催を快諾いただいた。さらにこの論点をめぐっては2018年度中、Miravete 氏とかなり踏み込んだやり取りを行うことができた。打ち合わせから浮上してきたのは、ベルクソンが部分の和ではなく、部分を包括し、部分の交代にも関わらず維持される構造として「全体」を理解するという解釈方向である。数学的な関係性と変化・生成は、構造としての全体という性格を共有する。この共通性格により、自然および社会諸科学における確率論的な数学的関係性の、変化や生成への投影は可能に見える。ただ変化や生成はその「動的な」本性によって数学的関係性と区別されるはずである。これが研究代表者と Miravete 氏の共通理解であり、この点についての明確化と深化を図る路線で2019年のワークショップの計画を進めた。

2019年9月ワークショップは予定どおりこの方向性のもとで実施された。また10月のグルノーブルにおける発表も、ベルクソンの記憶における生成・変化を、部分の置き換えにかかわらず一定に保たれ、しかも予期しないものを生み出す「動的な」全体の構造として特徴づけることを主たるねらいとした。とりわけ9月のワークショップにおいては画期的な論点が導き出された。Miravete 氏が構造としての変化・生成の全体という論点を、ベルクソンの記憶論の解釈をめぐって提示したのに対して、During 氏は生成や変化を物理学的実在のレベルまで拡張して分析し、構造の「動的な」本性を「予測不可能性」と理解したうえで、この本性を特徴づけるのは果たして何かを問題にした。During 氏によればそれは、物理学的には相対論や量子力学が示す、空間的に隔った時間系列の同時性の、まさに全体の構造としての性格である。翻ってこの空間的に隔たった同時的全体という構造を、ベルクソンは記憶にもある仕方では認めているのではないかと During 氏は推測する。これらの解釈の深みと斬新さ、また両者の解釈の射程の交差ゆえに、

Miravete 氏と During 氏の間には濃密な議論が展開された。他方、Miravete 氏はベルクソンにおける時間経過（持続）を数として解釈するが、そのための条件として岡嶋氏が着目したのも、複数の時間系列の共存であった。この主張を掘り下げると、During 氏の論点と岡嶋氏の論点には浅からぬ接点が見いだせると思われた。さらに研究代表者は、記憶に見出された「構造としての全体」をベルクソンが物理的世界の背後にも見出そうとする過程を、近年刊行されたベルクソンの講義資料から追跡した。ただ、ベルクソンがこの理論展開においてまさに複数の時間系列の共存を重視することは確認しつつも、研究代表者は時間系列が織りなす構造の「動的な」本性の所在については判断を留保していた。Durin 氏の解釈がこの点で研究代表者にとって極めて示唆的であったことは言うまでもない。この意味で 2019 年のワークショップは本研究計画の到達点を示すとともに、新たな研究への出発点になったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Takuya NAGANO
2. 発表標題 Le tout et ses parties : remarques sur la duree bergsonienne
3. 学会等名 Philosophie contemporaine au Japon et en France PASSAGES PHILOSOPHIQUES III (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takuya NAGANO
2. 発表標題 Relation and encounter : a reading of Bergsonian "duration" around Matter and Memory
3. 学会等名 国際シンポジウム「『物質と記憶』を再起動する; 拡張ベルクソン主義の諸展望」(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takuya Nagano
2. 発表標題 La duree bergsonienne entre l'occurrent et le continuant : son statut dans les Cours au College de France 1902-1903
3. 学会等名 Bergsonian "duration" and its mathematical ranges (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takuya Nagano
2. 発表標題 Part-Whole Relation and Bergsonian "Memory"
3. 学会等名 Remembering: Analytic and Bergsonian Perspectives (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 平井靖史 藤田尚志 安孫子信 ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 書肆心水	5. 総ページ数 415
3. 書名 ベルクソン『物質と記憶』を再起動する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>国際シンポジウムBergsonian "duration" and its mathematical rangesの実施（2019年9月29日、東京大学本郷キャンパス）</p> <p>国際シンポジウムPhysical Time, Biological Time: Bergsonism Todayにコメンテーターとして参加（2019年10月24・25日、トゥールーズ・ジャン・ジョレス大学）</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	デューリング エリー (During Elie)		2019年9月29日ワークショップ提題者
研究協力者	ミラヴェット セバスティアン (Miravete Sebastien)		2019年9月29日ワークショップ提題者
研究協力者	岡嶋 隆佑 (Okajima Ryusuke)		2019年9月29日ワークショップ提題者

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中原 真祐子 (Nakahara Mayuko)		2019年9月29日ワークショップ準備・運営
研究協力者	野瀬 彰子 (Nose Akiko)		2019年9月29日ワークショップ提題者・運営
研究協力者	持地 秀紀 (Mochiji Hideki)		2019年9月29日ワークショップ提題者・運営